生一派の考現学は物の見方を現実の社会と結びつけた。貴族的なものから庶民的なものに接近した。しかしながら吉田氏や吉村氏は、今先生の西洋模様史からロココスタイルに専念したり、斎藤先生のリズム模様から影響を受けた者である。クラシックから生れ更に反動を称えた動きが、時の流れと共に大きく力強く生きてきたものだと思う。

しかし半面アカデミーと呼ばれても、教授連の人格と風格は講義を通して大きく影響し、特に日本的の筋を通したことは否定できない。大正十二年に図案科の二部（建築）を卒業した吉田五十八氏は私の尊敬する先輩の一人である。

当時図案科を卒業した人達は、郷里に帰〔ママ〕えって先生をしたり、指導所等に勤務した人が多かったが、恐らく母校の方針を踏襲したことだったろう。それでも専門の技術をもっていた者は別として、図案科に入ってから何かをつかもうとした人達は、何か物足りない気持で卒業してしまったのではなかろうか。私自身工芸学校の木材工芸科で家具を専攻してきたが、美術学校では関係ある講義以外専門的なことは殆んどなかった。しかし少しもあせらなかったのは、専門をもっていたからで、むしろ基礎的のものや、周囲から自分のところへ何か得ることを心掛けていたからである。

卒業と同時に家具の会社に入り三年め、あまりにも本真な物を知らないことに行詰りパリへ行った。そして一生懸命勉強している内、画壇の素晴らしさによろめきかけたが先輩から、ピカソばかりでなく光琳がいても良いのではないかといわれて、気持が落着いたことがあった。光琳という意味は必ずしも画家にならなくても工芸の途にも一流はあるという意味と思って、一途に家具装飾を専攻して今日に至っている。

昭和二年に帝展第四部ができ、その中にいわゆる家具が出品された。これは従来の工芸品のように家具の形をかりて加工技術を見せたものではなく、家具そのものであった。私はたまたまそれを作る方の立場に立ったが、まだまだ工芸装飾品的家具であって、今日のような機能本位にデザインされたものではなかった。当時他の専門的学校ではもっと突込んだ勉強をしていたが、上野の山では無理であった。

しかし、広い意味から見れば、今日のいわゆるデザインするということの出発点になりかけていたのではないか。

（上田幹一「私と美校図案科」『デザイン』28号　一九六二年一月）

⑩　三浦秀之助の『闇婆仏蹟ボロブヅゥル』

『闇婆仏蹟ボロブヅゥル』三帙（六冊）の大版写真集と『闇婆仏蹟ボロブヅゥル解説』一冊（四百三十八頁）は「東京美術学校蔵版」と銘打って三浦秀之助がボロブヅゥル刊行会から大正十三～十四年の間に発行した大部の研究書である。『東京美術学校校友会月報』第二十二巻第四号（大正十二年七月）の表紙裏には本書刊行案内が大きく掲載されており、それには大村西崖・三浦秀之助同選と記されているが実際に刊行されたものには大村西崖の名は無い。正木直彦序。

本書とほぼ同時期に井尻進の『ボロブドゥル』（同十三年、上海、

大乗社）が発刊されている。井尻は大正五年にボロブドゥルを見て以来その紹介を思い立ち、松本文三郎博士の所説に依拠しつつ、オランダのライデン大学教授クロムから写真複写と書籍の翻訳権を与えられて本書を完成したのであるが、三浦の場合は一年間に亘り現地に滞在して非常な努力の末千数百枚も写真を撮り、帰国後は大村西崖の指導のもとで研究を続け、ボロブドゥルのより完全な紹介につとめたので、学界に貢献すること更に大であった。

三浦秀之助（昭和八年七月二十五日歿）は大正五年本校彫刻科から西洋画科に転じて翌六年卒業した。大村西崖著「闍婆の千仏壇」（『東京美術学校校友会月報』第二十一巻第二号）その他によると、三浦は卒業後ボロブドゥルの研究を志し、黒田清輝を介して大村の指導を受けるようになったが、やはり現地へ行って研究したいと思い、費用を工面しようとしていると、当時盛んに文人画を描いていた西崖が、自分の絵でも金に換えることができるならば、喜んで描いて上げると言う。そこで早速三浦の郷里大阪の三越呉服店で展覧会を開くことになり、西崖は大正九年の夏休み六十日を費して五十幅計り描いて贈り、さらに大阪倶楽部で応援の講演まで行なった。絵は四十幅程売れて、三浦は数千円を入手することができたため、大正十年二月に瓜哇へ渡航することができた。渡航に先き立って同九年三月二日付で三浦に対し本校から「ジャワ、マヅラ及スマトラ古代美術ノ調査ヲ嘱託ス」という辞令（上記月報第十九巻第一号）が出されているところを見ると、学校当局も幾許かの給費をもって応援したものと考えられる。一年後の同十一年三月、千数百枚の写真とともに三浦は帰国し、その五月には大阪三越で将来品の展覧会を開いた。

『闍婆仏蹟ボロブヅゥル』は帰国の二年後に発行されるが、これに関連して『東京美術学校校友会月報』第二十一巻第二号には三浦がもたらした写真と上記の「闍婆の千仏壇」が、また同誌第二十二巻第四号には同じくボロブドゥールの写真と「ボロブヅウルに現はれたる華厳に就いて」と題する三浦の研究の一端が掲載された。なお、その後昭和六年十一月発行の同誌第三十巻第五号にも「ハダーの仏教彫刻」と題する三浦の寄稿が見られる。

⑪ 推古会

同会は正木直彦、岡田三郎助、吉川霊華、朝倉文夫、内藤伸、松田愚仏、田辺孝次、伊藤信次らが同人となって作った古美術鑑賞研究を目的とする会で、時折り本校倶楽部でテーマに基づいた展覧会を開いた。第一回展は大正十三年六月十五日で、各方面から集められた古代唐獅子（狛犬）およびその応用品百数十点が陳列され、千人近い来観者があった。第二回展は同年十一月十五、十六日で、甎および明器（土偶、俑等）が展示され、第三回展は同十四年四月十八、十九日で、絵巻物およびその残缺が展示され、第四回展は同年十月二十四、二十五日で、金銅仏が展示されたことが『東京美術学校校友会月報』や『十三松堂日記』から判る。